

## 私の養鶏随想録

加藤 宏光

前号で触れた《MD 発生防御率》とは、最終育成率が93%あるいは75%ということではない。無ワクチンの対照区でMD発生率が25%であれば、試験区では25%の93%すなわち3%程度のMD発生被害で抑えられる、ということの意味する。この当時には複合型慢性呼吸器病で死亡・淘汰されるものも多く、死亡・淘汰鶏を全例病性鑑定することができる検査機関として家きん試験場が選ばれたものである。

この時の交流をきっかけとして、この数年後に筆者は上野製薬に暫く身を置くことになった。その経緯は後に改めて紹介しよう。

## ワクチン開発までの対策

アメリカ由来の白色レグ系産卵鶏ではMD発生率が25～30%に及ぶものが多かった。そこで、遺伝的にMDに抵抗力の強い鶏種が好まれて飼育されるようになった。

《ソンバー》という鶏種がその1例である。この鶏種は通常条件で飼育して、MD発生率が10～15%で収まるため、好んで飼育された。育成率が80%を超えることもある半面、卵のサイズが極端に小さいことが欠点であった。しかし、育成率の高さが欠点を補うものとして、圧倒的なシェアを占めた。

MDがもたらした問題視されたのは採卵業界である。プロイラー農場からの病性鑑定では、MD症例は極めて少なかった。あるプロイラー農場が鶏舎・設備をそのままに、採卵用育成農場へと切り替えた。それまではMD問題が皆無であったのに、採卵用育成の最初のロットからMDが発生し、20週齢の出荷時点で30%を超えるMD被害を被った。成鶏農場への移動後に発生したものを入れれば40%を上回る死亡・淘汰率という膨大な被害である。

特にこの農場は育成したヒナを20週齢で販売する大ヒナ業者であったからたまらない。出荷先の採卵農家から大変なクレームを受けることになった。しかし、プロイラー生産時代にはMD被害を実感できなかったことで、家きん試験場へ相談に来たのである。

病性鑑定で典型的な内臓型MDであることが明らかにされた。この農場では脚弱が発生し始めるのが60日齢、80日齢頃から内臓型が出現し、100日齢を超える段階では内臓型が大部分となっていた。

プロイラー農場では飼料効率の最も良い時期、55～57日齢でオールアウトされる。この時期にMDがさほど発生しないから、プロイラー生産ではMDに注意を払わなかった。しかし、採卵用大ヒナでは70日齢過ぎにMDが発生してくる。それほどにMDの発生時期は育成後半以降となっていたのである。

## 最悪のMD発生事例

採卵鶏への抗菌剤（抗生物質を含む）が合法的に使用できた40年前の話である。フランス系のある抗菌剤の常時飼料添加がどのように産卵成績に影響するのかを調査してほしいという依頼試験があった。

前述したMDワクチンの効果試験と同様に引き受けた。やはり鶏群の半分を濃厚投薬区、残りを通常投薬区と無投薬区に分けて飼料に添加して薬剤効果をみるのである。

育成期間から病死するものを全例チェックする計画で、自転車通勤していた職員に毎日寄り道をして、その日にピックアップしたヒナを全部ラボへ持ち込むことにした。当初、各区数羽であった病性鑑定ヒナが60日齢を超える頃から徐々に増加する。そのうちに死亡するものが多過ぎて、とても自転車では運べない。毎日20～30羽にも達したのである。1000羽ほどのロットサイズで毎日20～30羽死亡・淘汰すると10日で2割ものヒナが減ることになる。130日を過ぎる頃に残っているのは60%弱である。これでは試験を継続してもデータはとても使えない。やむを得ず、薬剤メーカーと相談の上、野外試験を中止した。

中止の後に、生産者がとんでもないことを打ち明けてくれた。

《当時、MDワクチンが自由に入手できなかったこと、ワクチンコストが1羽当たり40円したこと、人伝に試験という名目で闇ワクチ

ンを購入して接種していた》のである。そのワクチンの品質が粗悪で、使われたMDワクチンが病原性を有していた。人為的にMDを発生させたことになる。

それから1年ほどして、最終的な残存率を確認したところ、20%を切っていたという。育成から産卵初期に渡って、80%を超えるヒナが死亡もしくは淘汰されてしまったことになる。当時の通常MD発生レベルは20%余り、酷い場合でも40%に及ぶことは少ない。MDという疾病の実態から想像していたよりMDウイルスの発病能力は遥かに激しいものであることを知った、恐ろしいほどの経験である。

その後、ワクチンの普及でMDの被害は急速に低減し、産卵成績は安定した。先に触れたソンバー鶏は瞬く間にシェアを失ったのである。新しい技術が古きを駆逐する1例として思い出される。また、MDがコントロールされるに伴い、卵価が低迷する期間が長くなった。経営がますます厳しくなってきたことは皮肉というべきであろう。

## 転進～自分で自分の道を探そう

筆者が大阪市立の家きん試験場へ勤めた時、このエリアにはまだ150万羽の採卵鶏がいた。しかし、オイルショックの前に到来した土地バブルで採卵養鶏生産者は地道なタマゴ産業に飽きがきたようである。市域の養鶏羽数はみるみる減少し、MDワクチン試験が終了した時には総羽数50～60万羽になっていた。

当時の家きん試験場には鶏病担当が4人、飼養担当が3人、事務所の3人に加えてパート作業のおばちゃんが3人、合計13人が働いていた。それに対して採卵鶏の数が60万羽。これではとても予算が維持できない。大阪市は廃止または統合への道を探り始めた。

筆者として大阪地域の養鶏羽数が維持できずドンドン減少することは、奉職する時点で想像できた。しかし『筆者を引っ張った吉村博士が筆者の指導に10年は同じ職場にいてくれるであろう。家きん試験場は15～20年程度はもつのではないか…』と考えていた。若さゆえとは言え、いかにも甘かった。

鶏の病気を追い掛けるために大阪市へ入ったのである。家きん試験場が廃場になってもまだ勤め続けるつもりはなかった（当時の仲間は随分と引き止めてくれたが!!）。

考えてみれば家きん試験場は市立であり、そ

れゆえに大阪市が《維持したくない》と言えようもない。そうとなれば、自分で創るしかない。しかし、小さいといえ家きん試験場は公立であり、自分は公務員。税金で食っている自分が経済社会で通用するものか否か、それがそもそも問題である。試行錯誤の末、上野製薬で開発担当の重役をしていた故渡辺正太博士（MD不活化ワクチンの件で知り合いとなった）を訪ねた。

この会社に勤めるに当たって、5時以降は自分の研究を自由に行えること、役職につけないこと、3年は勤めるが4年は勤めないこと、と条件を付けた。『これらの条件にOKをいただけるなら、お願いします』と無理な話をしたところ、『いいですよ!!』と軽く受け入れられたので、早々に転職を決めた。

家きん試験場で7年、その前に大学院で1年、8年間のハンディを負っての入社である。先に入社した社員と同等以上の仕事をできないなら社会人失格であろう。とても自分の家きん試験場を作るところではない。それが改めて社会へスタートする自身の課題であった。

筆者は3月1日に中途採用となった。新卒入社は4月1日入社である。前歴を踏まえて入社早々に営業スタッフの技術教育を行うことになった。3月中に仙台、東京、名古屋と地元大阪の営業所でそれぞれ10人ほどの営業社員を相手に鶏病セミナーを行うのである。すべての営業所でのセミナーを終えて研究所へ戻ったのは4月を1週間も過ぎた頃であったろうか。

当時所属した畜産・水産用薬品部門には新入の女性社員が3人配属されていた。彼女たちが筆者に接する態度が何だかおかしい。同じ新入社員なのに、大先輩に接するように怖ず怖ずしているのである。訳のわからないまま2カ月ほど経った。やっと打ち解けた新入女性社員が話してくれた。

『年齢は30歳位で、各営業所へ教育に出張している、と聞いたのでベテラン研究員に違いないと信じ込んでいた。初入社の日にもいなかった。誰も紹介してくれないし、勝手に思い込んで誰にも確認せず、ただ恐れ入っていた』のだそうである。

『俺だって新入社員なんだ!!』と皆で大笑いしたものであった。こうして、新しい社会へのデビューは始まった。

（筆者：㈱ピーピーキューシー代表取締役社長／農学博士・獣医師）